

イエスはラザロを生き返らせたことで、最高法院の人たちから命を狙われることになります。ヨハネ福音書11章45節によると、死んでから4日も経っていたラザロが墓から出て来て、イエスの言葉によって生き返らされたことを目撃したユダヤ人の多くの者が、イエスのことを信じるようになったのです。ところが、このユダヤ人たちの中の一部の方がファリサイ派の人たちのところに行つて、イエスの行ったことが当時のユダヤ社会に大きな災いをもたらすのではないかと密告する者たちがいたのです。この密告相手のファリサイ派の人たちは、最高法院の構成員であったファリサイ派の人たちであつたようです。ですから、最高法院に属しているファリサイ派の人たちと祭司長は最高法院での会議を招集して、イエスの処遇をどうするべきかを話し合つたのです。当時の最高法院ではファリサイ派の人たちが比較的勢力を握つていたようです。

イエスがラザロを生き返らせた業がどうして、ローマ帝国が支配する現実を脅かすことになると思つたかの詳しい理由は全く述べられていませんが、おそらくイエスの奇跡的な業が、ローマ帝国の支配の現実に不満を抱いているユダヤ人たちに、イスラエルを救うメシアとしての働きを待望させることへの危機感から、これ以上イエスの業を信じる者たちが多くなることを阻止しなければならぬと考えたのでしょう。ローマ帝国の支配に抵抗して独立運動でも起こされたら大変だという気持ちだつたのでしょう。

当時のパレスチナ地方を支配していたのは、ローマ帝国です。ローマ帝国の属州の一つにユダヤ地方は組み入れられていましたが、最高法院による自治がユダヤ地方では許されていきました。最高法院はサドカイ派と呼ばれる神殿貴族たちやファリサイ派の人たち、さらに名家と言われる不在地主たちによって構成されていて、死刑の執行権などの権力はありませんでしたが、大幅な自治権を持っていました。49節に登場する大祭司カイアフアは19年間も大祭司の職に就いていたサドカイ派の人物です。

このカイアフアが49節後半からイエスの処遇について話すのです。「あなたがたは何も分かつていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えなのか」と言うのです。これらの言葉のなかで「国民全体が減びないで」(50節)という言葉に注目したいと思います。この言葉は一見国益を守るような言葉に聞こえますが、実際には違います。サドカイ派の人たちは、ローマ帝国の庇護のもとで、自分たちの自由裁量で、神殿での利益を独占していました。その利権をローマ帝国の機嫌を取り結ぶことで失いたくなかつたのです。これは戦後の日本における自民党とアメリカの関係に似ています。アメリカの意向に従う中で、自分たちの利益を守ろうとする政治的行動と似ています。

ところが、大祭司カイアフアは51節以下でイエスの贖罪死についての預言を述べています。もちろん、ヨハネ福音書が書かれたのは紀元90年代ですから、イエスの十字架のことが影響しているのですが、ここでは、大祭司カイアフアの預言としてイエスの死が預言されているのです。けれども、ここで言われているイエスの贖罪死は、私たちキリ

スト者たちにとつての贖罪死とは内容が全く違うものなのです。表向きはイエスの贖罪死のように見せかけていますが、内実は、自分たち最高法院のメンバーの利益を守るための犠牲のシステムのことです。国家のための犠牲が美化され、権力者たちの利益が守られるためのものなのです。

現代でも、沖縄に偏った米軍基地の問題でもそうですし、靖国神社の問題もそうです。日米安全保障条約の継続のために辺野古に新しい米軍基地を建設するというのも、犠牲のシステムですし、靖国神社に戦争の犠牲者の英霊を祀ることで、国家を恨んでいた遺族たちの感情を、逆に国家への感謝の気持ちへと変えさせるための犠牲のシステムだと言えるものなのです。哲学者の高橋哲哉さんが「国家と犠牲」や「犠牲のシステム 福島・沖縄」という本の中で言っていることです。今でも、戦争で犠牲になる人を、この犠牲のシステムによって英雄視するような偽善が国家によって行われています。

これに対して、イエスの犠牲死は方向性が全く違います。イエスの犠牲の十字架死は、権力者の自己保身の偽善的な犠牲のシステムとは違います。何が違うのか。それは、イエスがご自分に無理解な人たちが自分を十字架にかけて殺そうとしていることを受け入れて死んで行ったことが示しています。そこには自己保身のかけらもありません。自分を殺そうとする人間のためにも命を差し出す姿勢が象徴していることは、私たち人間を無から存在する者として命を与えてくださる神の創造の業なのです。イエスの十字架死を、私たち人間の贖罪死と捉えることは、間違いではありませんが、犠牲のシステムとしてのイエスの十字架刑死があるわけではないのです。私たち人間の罪を贖うためにイエスが十字架の上に死んだという論理は、あまりにも単純化しすぎています。それでは、罪の自覚を持たなければ救われられないという結論訝え導かれる結果に陥りやすいのです。確かに、創世記で人間を創造された神に対してアダムとエバは罪を犯したという点を用いて、それを原罪とすることで、人間は原罪を背負っていると解釈して、その罪をイエスが贖うために十字架上で死なれたと連続して解釈する見方もありますが、人間を創造された神は果たして、原罪を抱える人間を創造し続けているのか？ そのように考えてみると、原罪を抱えている人間を創造する神の意図自体がわからなくなります。

神がアダムとエバを創造したのは、人が独りでいるのはよくないと考えたからであり、それは、人間が他者と共に生きていく倫理性が必要だからです。イエスが十字架刑死を受け入れたのは、この他者と共に生きていく人間の倫理性を示すものだったと考えるならば、たとえ自分の命を奪おうとする敵であっても、共に生きていくことが、人間にとつて神から求められていることだと考えたと解釈できるのではないのでしょうか。それはイエスが隣人愛を提唱したこととも合致します。

他者のためにもイエスが死んでくださったがゆえに、その事実には促されて、私たちは他者を受容して共に生きる生き方へと導かれていくのです。これは、切り捨て・排除の犠牲のシステムとは対極にある生き方なのです。そのような生き方へと招いてくださっている椅子の十字架を見つめつつ、今週も自分の周囲の人たちと共に生きていく神の導きに委ねていきましよう。